

# 中学生にもわかる セイジの話

横須賀市議会議員

小林 伸行

2018/3/27

# 民主主義って

## ズリウリウリウリとななの？

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.17】

市でいちばん偉いのは市長？ 国でいちばん偉いのは総理大臣？ さあ、誰でしょう？

横須賀市でいちばん偉いのは、あなた。日本でいちばん偉いのも国民。つまり、主権者だ。憲法前文で高らかに宣言されたとおり、権力は国民が持っている。そして、その権力を議会や首長や裁判官や公安委員長や教育委員長などに預けている。しかも、暴走しないように分散して託している。これが国における三権分立や地方におけるエージェンシー制(委員会制)だ。いずれにしても、これらの官職は公僕。つまり、主あるじの権(ちから)をもつ者に仕える、公(おおやけ)の僕(しもべ)に過ぎない

成人式は20歳。でも、実は18歳から、もう大人だよ。

もうすぐ成人式の季節。ところで、20歳を対象に成人式をしているけど、本当にそれでいいのかな？ というのも、2016年から18歳選挙権が始まっている。そして、正式に社会を構成するメンバー(公民)として認められた選挙権(公民権)こそ、成人の証とも言える。もちろん、民法第3条には「満20年を以て成年とす」と書かれているが、民法は契約など主に財産取引のための法律だ。そして、選挙権と揃えて、民法も成年は18歳に改正される見込みだ。ちなみに、運転免許も18歳から。一方、タバコやお酒は20歳のままだ。判断能力を基準にした公選法・民法・道交法とは違って、身体の成熟度を基準にしているからだ。つまり、ホントの大人の証はタバコやお酒じゃない。選挙だ

あなたのサイフに勝手に手をつっ込めるのは、泥棒と行政だけだ。

ドラえもんのジャイアン風言えば、日本は「俺のものは俺のもの。お前のものはお前のもの」だ。つまり、財産権が保障されている。しかし、あなたの財産に手をつけられるものがある。それは、行政だ。あなたは税金を払っている。買い物みたいに選ぶことはできない。納税は義務だ。強制的に徴収される。つまり、行政は勝手にあなたのサイフに手をつっ込める。ただし、あなたの代表(議員)が決めたルール(法律)に基づかなければ、税金を徴収されることはない。その意味では、勝手にとられるわけではない。それ以外に、あなたの財産に手をつけたら、その瞬間に違法。つまり泥棒だ。

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.2】

**市議会議員は、市長の部下じゃない。むしろ、市長の監督者。ただし、世の中には市長の腰巾着と化した議員もいる。**

株式会社にとえれば、市長は社長で、議員は取締役。ただし、日本型オーナー企業のイメージだと、取締役も社長の部下だと勘違いしている人が多い。日本の地方自治制度は戦後にアメリカから導入されたので、米国型株主主権モデルになっている。社長に執行を任せるが、株主たちから送り込まれた取締役がしっかり社長を見張る

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.14】

**民主主義とは、自分たちのリーダーを選挙で選ぶ仕組みではない。使用人を選ぶ仕組みである。**

民主制(Democracy)とは、民(たみ)が主(あるじ)の制度、と書く。主の上に、主はいない。つまり、私たちが選挙で選ぶのは、私たちが統治する者ではない。使用人だ。私たちが決めたルールに則って、私たちの役に立つべく働いてくれる雇い人だ。そうは言っても、私たちの中にも、ルールを守らない者が出てくる。だから、使用人に命じて、私たち全体の代理として、みんなにルールを守らせている。別に、その権限を与えられている使用人が偉いわけではない。ただし、時間が経つうちに、「俺って偉いんだ」と勘違いする使用人が出てくる。いつの時代でも、どんな社会でも、必ず出てくる。民主制をまもるためには、そういう使用人をクビにすることが大事だ。大丈夫。紙キレ一枚で、カンタンに解雇できる。そう、あなたの一票で

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.10】

市長は、「市」民の「長」ではない。「市」役所の「長」だ。

前々回もふれたが、市の中でいちばん偉いのは市民だ。そのため、市長は、市民の長ではない。かつてアメリカでは、市民がカネを出し合って、保安官など自分たちに様々なサービスを提供する使用人を雇った。このお雇い職員が増えて、市役所になっていった。この組織を管理させるために、経営者を雇ったのが市長(City Manager)だ。日本の市長は、戦前は統治者だったが、戦後はアメリカ式を選んだので、現在は市役所の長ということになる

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.10】

日本を代表するのは、総理大臣じゃない。天皇陛下。

国家元首と行政トップは別だ。イギリスなら、エリザベス女王とメイ首相。ドイツなら、シュタインマイアー大統領とメルケル首相。スペインなら、フェリペ6世国王とブレイ首相。日本なら、天皇陛下と安倍総理。というわけで、前回 Vol.9 の市の話と国も同じだ。総理大臣は行政の代表に過ぎない。そして、日本国民を代表されているのは天皇陛下だ。だからこそ、衆議院の解散も、内閣の任命も、最高裁の任命も、天皇陛下が行われる

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.16】

**子どもも、有権者ではないが、主権者だ。**

18歳未満は、選挙権を持たない。つまり、有権者ではない。では、政治に口を出す権利がないのだろうか？ 実は、そんなことはない。横須賀市では、2016年に市政初となる小学生からの陳情が出された。全国でもまれか初らしく、複数の「くやネットニュース」で取り上げられ、注目された。子どもであっても、政治参加ができる証拠だ。子どもも国民。つまり、この国のオーナー・主権者だ。ついでに、納税者でもある。私は「なぜ小中学生にまでチラシを配るのか？」と時々たずねられるが、彼らも私の雇い主でありお客様だからだ

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.25】

**投票に行かないのと、白紙の投票は、意味が全然違う。ナメられないために、とりあえず選挙は行つとらう。**

我々は、役所の経営者として、議員や首長を送り込んでいる。そして、選挙を通して優秀な経営者を選んでいく。この投票に行かないということは「何でもお任せします。文句言わないから好きにしてよ」という意味だ。そんな人ばかりで投票率が低いと、政治家も役所も「民衆の関心は低いから、何でも勝手に決めていいんだろうな」と思うのは当たり前だ。一方、選挙で投票用紙に何も書かず白票を投じることは、「今回の候補者の中に、眼鏡にかなう人物はいないから、この中からは選べない」という意味だ。逆に「無関心じゃないよ。ちゃんと見てるよ」との無言のメッセージとなる。使用人たちにナメられないように、この国のオーナーのみなさん、とりあえず選挙には行つておこう。

# 選挙にまつわる

## あれこれ

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.27】

期日前投票のとき、投票日がムリな理由を聞かれるが、実は何でもいい。だから行けるとときに投票には行っておこう。

今は、投票日まで待たなくても期日前投票で投票ができる。ただし、期日前投票所に行くと、投票日に投票できない理由を「宣誓書」に書かされる。だから、「別に用事があるわけじゃないんだよな」と気後れする人もいるかもしれない。でも、大丈夫。法律で決まっているから書かせるだけで、内容は問われない。担当者によっては見もしない。私なんて、いつも「( )に従事のため」欄に「(居眠り)に従事のため」と書いて出しているが、何も言われない。だから、選挙戦の最後までじつくり見極めたい人は別として、もう心を決めた人は行けるうちに投票に行っておこう。また、投票日に台風が来るかもしれないから。

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.28】

**選挙の当選倍率は、実は高校入試並み。いつか、出馬も考えてみませんか？**

選挙で勝つのは大変だと言われる。しかし、倍率で見ると、高校入試が1〜2倍程度で、地方選挙も同じくらい。1000人選挙に出たら、800人ぐらいいは受かるイメージだ。市町村によっては、定員割れで「無試験合格」できるまちもある。ちなみに、横須賀市議選は比較的「偏差値」が高い。倍率も前回1.32倍、前々回1.49の「難関校」だ。とはいえ、新卒の就職活動は100倍なんて当たり前の世界。そう考えれば、就活と同じぐらいの労力を割けば、当選できる人は多いだろう。しかも、若くても当選すればいきなり取締役や社長クラス。いわゆるヤング\*だ。……ただし、選挙に出られる被選挙権は25歳から(首長と参議は30歳)。また、入試や就活と違って併願はできないので、浪人は覚悟だ。加えて、当選したらあなたは住民の代表だ。あなた一人の仕事ではなくなる。そこは、就職や学校とは違う。

\*ヤング：ヤング・エグゼクティヴの略。若くして報酬と地位の高い仕事に就いた者を指す、バブル時代の用語

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.31】

**地方議員は1%の支持で当選できる。2%ならトップ当選だ。**

地方議員になるには、誰にでも愛想を振りまく必要はない。有権者の1000人に1人。1%の人があなたを選んでくれればいい。99%からどんなに嫌われようが関係ない。たとえば横須賀市議選の場合、有権者34万人の1%は3430票。前回の最下位当選は1921票だから、1%なら余裕で当選できる。ちなみに、有権者の2%は6860票で、前回のトップ当選が6626票だ。この「1%の法則」と「2%の法則」は、大半のまちで当てはまる。自分のまちの選挙結果で確かめてみよう。

\*

\*ただし、これは大選挙区制の一般市区町村の話。ごく一部のまち(中選挙区制の都道府県や政令市)には当てはまらない。

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.32】

## 首長選や衆院選のような1人を選ぶ選挙では、敵をつくらないことも大事。

前回、地方議員は1%の得票で当選できると書いた。ただし、首長選や衆院選は別だ。首長も小選挙区も1人を選ぶ選挙。有効投票数の40?50%は獲得しなければならない。1%のファンならつくれても、50%のファンはなかなかつかれない。むしろ、たとえ誰一人好きになつてくれなくても、半分以上の人が「他の候補者より、まだマシかなあ」と思ってくれればいいのだ。だから、比較優位に立つには、まずは嫌われないことも大事になる。

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.29】

## 政治家になるための試験科目は面接だけ。ただし、究極の集団面接だ。

政治家になるのは、ハードルが高いと思われる。しかし、実はイメージほどじゃない。実際、学歴も職歴も問われない。田中角栄のように中卒だつて総理大臣にもなれる。筆記試験も適正検査もない。障害を抱えていても、もちろん問題ない。親が犯罪者だろうが外国人や被差別部落だろうが、貧しい家庭の生まれだろうが、もちろん出自も関係ない。何の資格も要らない。ただ、日本国籍で、犯罪歴がなく、25歳(首長・参議は30歳)以上であればよい。そして、政治家になるには、ただ「面接試験」をパスすればよい。普通の面接と違うのは、「選挙期間」という数日間にわたる面接だということだ。しかも、「面接官は1人じゃなく、横須賀市なら34万人もいる。彼らに50?60人の候補者の中から自分1人を選んで名前を書いてもらう」という、究極の集団面接だ。話し方から服装からスーパードで買物する品目まで衆人環視の中、一挙手一投足、どこで何を見られているかわからない。そんな面接を乗り越えた先に、投票日の夜遅く「試験結果」が発表される。

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.30】

「小選挙区」「中選挙区」「大選挙区」と言うが、実は選挙区の広さとは全く関係ない。

面積3km<sup>2</sup>と全国最小の市町村・富山県舟橋村も、村議選は「大選挙区」だ。一方、面積14741km<sup>2</sup>と衆院選で全国最大の北海道12区も「小選挙区」だ。つまり、この大中小は、選挙区の広さの話ではない。実は、選挙区から選ばれる議員の数を意味している。小選挙区は、分割された選挙区の中で、たった1人しか選ばれない仕組み。日本だと衆議院選挙\*だけが小選挙区だ。中選挙区は、分割された選挙区の中で数人が選ばれる仕組み。参議院選挙\*や都道府県議選・政令市議選が中選挙区だ。一方、大選挙区は、選挙区を分割しない。まち全域が一つの選挙区となり、全員がそこから選ばれる仕組み。一般市区町村の議員選挙が大選挙区だ。意外と、プロの政治家でも選挙区の広さの話だとカン違いしている人もいるくらい、まぎらわしい用語だ。

\*衆院選と参院選には選挙区の他に比例区の実選挙もある。

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.22】

投票は、実は手ぶらでOK。ハガキが送られてくるけど、あれは入場券じゃない。

投票は、実は手ぶらで行ける。投票日も期日前も、どちらも同じだ。よく選挙の直前に、役所からハガキが送られてくるが、あれを「投票券」や「入場券」だと思っている人が多い。若い頃、私もカン違いしていて、部屋に忘れてきたから投票をサボったことがある。ところが実はあのハガキは、ただの案内状。よく見ると確かに「投票案内」と書いてある。投票所で行くつかの質問に答えれば、ちゃんと投票用紙をくれる。だから、何はなくとも、選挙には行こう。

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.17】

タスキやノボりに「本人」と書く政治家が多い。あれは、名前を出せないからだ。

政治家が名前を売っているのは、5〜10日程度の選挙期間だけ。この「私、〇〇を当選させてください」と訴える活動が、「選挙活動」だ。しかし、実際にはそれだけで当選することは少ない。普段からの「政治活動」の実績が認められて、当選する者が多い。ただし、政治活動は、主張や政策を訴えるものだ。別に、名前を出す必要は全くない。とはいえ、「この政治活動をやっているのは、他でもなく私なんですよ」と、名前を出さずに自分を認識してもらおうツールが「本人」なのだ。ただし、抜け道もある。実は政党に所属している政治家は、「政党活動」の名目で「時局講演会 弁士横須賀花子」という具合に名前を出すことができる。地方政治には国政政党は直接関係ないとはいえ、それも政党に所属するメリットだ。



【中学生にもわかるセイジの話 Vol.16】

選挙は、人の死なない戦(いくさ)だ。

かつて、戦国武将は闘って敗れば首をとられた。政治(統治)は命がけだった。それが現代では選挙だ。大阪都構想で勝負して敗れた大阪維新の会の橋下徹氏は「負けたのに命を取られない政治体制は、日本はすばらしい」と言った。本当にそのとおりだ。ただし、選挙関係の用語は今なお戦国時代さながらだ。出陣式。出馬。刺客。影武者。……武将よろしく、家紋の代わりに政党のマークを入れたのぼりを立て、選挙戦に名乗りをあげるあたり、いかにも戦らしい。

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.34】

## 選挙カーは、「センシヤ」と呼ぶ。

ワンボックスの車、たいていは白色で、上に看板がついていて、大型スピーカーを乗せている。政治家以外ではなかなかお目にかかれない、あの車。この業界では「センシヤ」と呼ぶ人が多い。正式名称は、選挙期間中は選挙カー、その他の期間中は街頭宣伝車(略して街宣車)だ。だが、呼び分けるのが面倒なのと、「選車」「宣車」の他に選挙戦の武器となる「戦車」を掛けて「センシヤ」と呼ばれる。正式な由来はわからないが、たぶんそうじゃないかと思う。ちなみに、候補者が手を思いつきり振れるよう、助手席の窓が全開になる車種は人気がある。あと、屋根に櫓を組んで候補者が車上に立てるカスタマイズも人気だ。さらに、夜でも看板が見えるよう照明付きも人気だ。ただし、車のバッテリーに負担がかかるため、最近では「LEDタイプ」が人気だ。このように、大事な商売道具だけに、涙ぐましい改善努力が積み重ねられている。

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.35】

## 女性はウグイスだが、男版はカラスと呼ばれる。最近ではオウムもいる。

選挙カーでマイクを握る女性運動員を「ウグイス」「ウグイス嬢」と呼ぶ。これなら、みんな知っている。これが男の場合、ギョーカイでは「カラス」と呼ぶ。ちなみに、候補者が休憩中、助手席に候補者とやや似た人に乗せて、あたかも本人が精力的に活動しているように見せる場合には「影武者」と呼ぶ。最近では、本人の声をレコーダーに録音してオウム返しにリピートさせるなど巧妙化している。どうやら、選挙は鳥類に縁があるのかも。

## 政治業界は時代遅れ。ネット広告の時代に、ちようちんを規制している。

日本の政治は、最も古風な業界の一つだ。いまやインターネットが当たり前の時代。とりわけ公職選挙法の問題は「政治にお金がかからないようにすること」なので、低価格のインターネットは推奨すべきなのに、つい最近までネット選挙はできなかった。その一方、いまだにちようちんの規制までしている。ちなみに、洒落で本当にちようちんを使う議員もいる。国会議員と秘書の関係も、丁稚奉公や徒弟制度的な慣習がまだまだ残っている。あと、私の感覚では民間企業の平均よりセクハラ発言割合が高め。業界がオジサン化している。また、政治家本人は公職だから何を言われても仕方ないが、その夫や妻まで色々言われる。いわば、家業となっている。さらに、政策より地縁・血縁や根性論で票が入ったりする。会社で言えば商品力よりドブ板営業で受注が決まることの多い業界だ。……小売や物流の業界のように業界地図をガラリと塗り替える政治家が現れるかどうか。「消費者」の選択次第だろう。

# 政治の制度は ややこしい？

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.1】

市町村は、国や県の下ではない。対等の関係。ただし、タテマエ。

地方分権が進んだいま、市町村にできないことを都道府県が、都道府県にできないことを国が、という補完性の原則(subsidiarity)に沿って行政するのが欧米標準。ただし、ニッポンの現実には、未だに国は地方を下請け扱いするし、地方も国に甘えている

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.5】

**海外には、「市長」が2人いるまちも多い。**

ニッポンの市長は忙しい。名誉職の面と実務職の面がある。ところで、海外では、これを分けているまちも多い。式典や表敬などにあたる市長(Mayor)と、市役所の組織や予算の管理を司る市長(City Manager)とが、いたりする。ちようと、ドイツ・イタリア・中国などで、儀礼的な大統領や国家主席のほかに、行政トップの首相がいるイメージ。誰がトップでもどうにかなった右肩上がりの時代が終わり、地方行政に経営が必要な今、市長に名誉職まで務めさせる現状には疑問の声もある

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.6】

**ニッポンは国より地方のほうが大きい。財政規模は、国が3割で、都道府県&市町村が7割。……でも、見かけだけ。**

予算規模で比べれば、支出は国：地方113：7。地方のほうが大きい。ところが、収入で見ると、国：地方116：4と逆転。地方は足りない分をどうしているのか？ つまり、国が集めて、指図つきで分配している。だから、地方に裁量はあまりない。この地方自治の状況を揶揄して「4割自治」と言われる

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.8】

## 横浜・川崎・相模原は、神奈川県じゃない?!

横浜・川崎・相模原と、3つも政令指定都市があるのは神奈川県だけだ。そして、政令市の権限は都道府県とほぼ同格。県にあって政令市にない機能は、警察と農林水産ぐらいだ。あとは、県のほうが高校をたくさん持っている程度か。その意味で、地理的には県の中にあるが、行政的には県の中にも言えない。ちなみに、横浜・川崎・相模原の人口は、神奈川県全体の65%を占める。つまり、神奈川県という自治体は、実は1/3の県民向けだけに仕事をする役所なのだ。

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.40】

## 日本の国会はイギリス式、地方政治はアメリカ式だ。

議会制度はイギリスで形づくられたと言われる。日本では大正デモクラシーの時期に、そのイギリスと同様の議院内閣制に近づいていった。つまり、国会議員の中から行政トップの首相を選ぶしくみだ。一方、地方にも議会はあったものの、首長は国が送り込む仕組みだった。いわゆる官選首長だ\*。その後、第二次大戦で負けた日本は、アメリカの占領下に置かれた。このとき、G.I.の指導の下、中央集権だった日本は地方分権に改められ、地方自治制度が整えられた。そして、地方はアメリカに多い大統領制となった。つまり、議員とは別に、行政トップの首長も選挙で選ぶ仕組みだ。……どうせアメリカに似せるなら、今後は憲法改訂して、アメリカみたいに地方でも議院内閣制か大統領制か直接民主制か、自由に選べるようにすればいいのになあ。

\*ただし、国へ「この人をぜひ市長に」と要望することで、実質的に議会が首長を選ぶ面もあったようだ。その意味では、議院内閣制的な性格もあったと言えるかもしれない。

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.4-1】

「議員なんていらぬなら、選ばなくてもいい。  
ただし町と村だけ。」

アメリカでは、まちのカタチを自分たちで決められる。議員を選ぼうが、市長を選ぼうが、誰も選ばないでまちの全員で話し合って決めようが、勝手だ。自分たちのことは自分たちで決めればいい。なにしろ自由だ。世界ではそういう国が多い。一方、日本ではどのまちでも、必ず議員と首長を選ばなくちゃいけない。なにしろ不自由だ。ただし、法律をよく読むと、実は町と村だけは議員を選ばなくてもいい。代わりに、まちのみんなで話し合って決める「町総会」や「村総会」をやればいい。「小さいまちなら選挙とかやるより集まって決めたっていいよね」という考え方だ。実際に、かつて神奈川県旧芦之湯村と東京都旧宇津木村では村総会で決めていた。最近でも高知県大川村で議会廃止論が出た。とはいえ、今は全てのまちに議会がある。：：：そろそろ憲法を改訂して、地方を自由にすべきじゃないか？

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.4-2】

アメリカには市町村がないまちがある。

日本では、誰もがどこかの市町村に住んでいる。どんな山奥だろうが無人島だろうが、そこはどこかの市町村だ。しかし、アメリカには市町村がないまちがある。かつて、アメリカでは先住民を追い出して開拓をして人々が住みついた。人が増えてくると、みんなでお金を出し合っけて保安官や教師を雇った。これが行政になっていった。この文化が残っている。だから、必要になれば地域を区切って税金を集めて役人を雇って市町村をつくる。逆に、不要になれば、役人を解雇して残金を整理し、市町村を解散する。ちようど会社をつくったり清算したりするのと同じだ。市町村がなくなった場所は、行政に頼らず自己責任で生活する。ただし、市町村が無くても日本の都道府県にあたる郡はある。学区区という独立した教育行政機関もある。だから、最低限のサービスは提供される。これを聞いて、今の横須賀市をいったん解散して第2横須賀市をつくれなにか、とも思った。が、日本では市町村が財政破綻したことはあっても解散した例は無く、どうやらムリらしい。

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.43】

アメリカには、市役所を丸ごと民営化したまちがある。

民営化は、行政がやっていた事業を民間に任せることだ。郵政民営化や国鉄の私有化のように、完全に民間に譲り渡す方法もある。また、ゴミ収集の業務委託や、保育園の運営委託など、部分的に任せる方法もある。この民営化の流れは主にアメリカから入ってきた。そのアメリカでは、民営化が行き着くところまで進んでいる。なんと、市役所をほぼ丸ごと民間企業に委託しているまちがある。それが、サンディ・スプリングス市だ。市の職員は数人しかない。仕事の中身と支払う金額を決め、業者を選んで発注し、あとはお任せだ。……横須賀市役所を解散して第二横須賀市をつくることはムリだが、横須賀市役所を限りなくスリム化して大部分を民営化することならできる。ただし、それがいいかどうかは、また別の話だ。

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.20】

国の仕事は色々あるけど、市役所の仕事は一つしかない。実は、福祉だけだ。

市役所は、実に色々な仕事をしているように見える。しかし、突き詰めて言えば、本業は「福祉」だけだ。市町村や都道府県の役所を「地方自治体」という。その仕事を定めた地方自治法第1条2項には「住民の福祉の増進を図ることを基本として」と書かれている。分野は高齢者・障害者・子ども・勤労者など多岐にわたるが、いずれも福祉なのだ。一方、国の仕事は幅広い。外交・防衛・経済・通貨など、ただでさえ忙しいのだから、福祉は市町村に任せてしまえばいいのになあ

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.2-1】

「保育園落ちた日本死ね」は間違い。それを言うなら「市議会議員死ね」が正しい。

「保育園落ちた日本死ね」というツイートが一時期話題になった。国会でも取り上げられたようだが、ちよつと待って。保育園をどうするかは、ホントは市町村の仕事だよ。国会議員にすら理解できてない人がいるから困る。そして、市の最終決定者は市議会議員。だから、保育園に入れなくて腹を立てるんなら、市区町村議会議員に文句言わなきゃダメ。……ところで、文句言う前に選挙には行ったんでしょね？ 行っていないなら、そもそも言う資格ないからね。

# 政治とカネは いつの時代も 大モンダイ

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.33】

## 政治家は年賀状を出してはいけない。

政治家は、自分の選挙区内の有権者に年賀状や暑中見舞などを送ることが公職選挙法で禁じられている。理由はいくつもある。第1に、政治家をしる公選法の精神は「政治にお金がかからないようにすること」だ。この人に送ってあの人に送らないわけにはいかない。そうすると大量になり、1枚62円とはいえないなりのお金がかかるため禁止している。第2に、政治家からの挨拶ハガキは「選挙のときには応援よろしくね」という意味にとられる。これは選挙期間外の「事前運動」と見なされかねない。第3に、年賀状や暑中見舞のハガキには当たりくじもついているので「利益供与」にもなりかねない。だから、年賀状をよこさない政治家は、礼を欠いているのではなく法を守っているのだ。ただし、もらった年賀状などに返事のハガキを手書きで出すことは問題ない。なお、私は政治家になる前からだから、筆不精の言い訳に使っている。

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.44】

**政務活動費は略して「セイカツヒ」だが、「生活費」とカン違いしてる議員もいる。**

地方議員には、議員報酬が与えられている。これはサラリーマンの給料にあたる。その他に、多くのまちで「政務活動費」というものが支給されている。これは、サラリーマンの出張費や資料購入費の費用弁償にあたる。つまり、仕事に必要な経費の仮払いだ。だから、使わなかった分は返さなければならぬ。しかし、かつては「第二の報酬」とも言われ、公金という意識が薄い議員も多かった。今でも、プライベートに使うて号泣会見や謝罪会見をする議員がゴロゴロいる。政務活動費は通称「セイカツヒ」だが、決して生活費ではないことを肝に銘じなければならぬ。

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.38】

**議員はコスパ。**

ある会で議員報酬の話になったとき、市民に言われた言葉。「議員報酬はいくらがいいのかって？ それはね、要するに議員ってのはコスパなんだよ。小林くんは市民にとってコスパのいい議員なの？ そういう話だよ」。なるほど。イマドキの言葉でわかりやすいなあ。コストパフォーマンスか。さあ、考えてみよう。その議員は、市民にとって雇っておく価値のある人ですか？ その議員達を、いくらで雇えるなら安いと思いませんか？

## 地方議員の月給は平均37万5千円。いつか、出馬も考えてみませんか？

全国の市町村議会議員の月額報酬は平均37万5千円\*となる。悪くない額だ。25歳から立候補できるが、若くしてこのくらいの額がもらえる仕事は多くない。ちなみに、横須賀市議の場合、月額65万円。年額ではボーナスを含め1089万円。外国なら国会議員並みの待遇となる。だから、昨年放映されたドラマ『民衆の敵』でも、主人公の主婦・佐藤智子は高給に釣られて選挙に出馬した。ただし、給料ではなく報酬という点に注意。いわばギヤラだ。この仕事は出費も多い。そのギヤラをもらうために、どれだけ投資する必要があるのか？ それを考えるのと割に合わないという人も多い。とはいえ、議員は兼職でもいいので、今の仕事を続けながら挑戦してみてもいいかもしれない。

# 雑談力が上がる

# 政治雑学

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.3】

**市議会議員は、実は公務員！ 市長も公務員。国も同じ。国会議員も総理大臣も公務員。**

市議も市長も、特別職地方公務員。ただし、いわゆる常勤職員ではないので、毎日役所に行く必要はない。兼職してもよい(他の公務員との兼職は×)。同様に、国会議員も大臣も、特別職の国家公務員。というより、憲法第15条3に「公務員の選挙については」と書いてあるとおり、むしろ議員や行政トップこそが代表的な公務員なのであった

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.1-4】

**国会には与野党があるが、市議会には与党も野党もない。……ことになっている。**

国会は、イギリス式(議院内閣制)。つまり、議員の中から行政トップ(首相や大臣)が選ばれる仕組み。ほとんどの場合、多数派の中から選ばれる。自分たちの仲間から首相や大臣を出した党派は、自然に応援派の与党となる。一方、地方議会は、アメリカ式(大統領制)。つまり、行政トップ(市長)も選挙で選ぶ。形式的には、市長はどの議員とも仲間ではない。……とはいえ、実際には「市長を支援したら、自分の政策を市に取り入れてもらえるんじゃないか」と考える議員が集まって『市長与党』が形成されることも多い

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.1-2】

**政治家の任期は、基本的に4年。ただし、短くなることはよくある。(参議院議員のみ6年)**

日本の政治家は、市町村の議員も、都道府県の議員も、国の衆議院議員も、任期は4年。首長(市町村長や都道府県知事)も4年。ただし、地方なら、議会が首長に「不信任議決」をすれば、首長が失職するか、首長が議会を解散することができ、任期は短くなる。同様に、衆議院も「内閣不信任決議」をすれば、内閣総辞職か衆議院解散ができる……ことになっているのだが、どういうわけか何にもなくてもしょっちゅう解散している。そのため、衆議院議員の任期は、実際には平均2年半ちよつととなっている。あと、署名を集めれば国民が政治家を辞めさせることもできる

## 地方議員には、地域代表、宗教代表、サラリーマン代表、業界団体代表、政党代表など、いろんな人がいる。

ひとつのまちで何十人も議員がいたら、議員も色々な層から選ばれてくる。

公明党の議員のように、創価学会という宗教団体から絶大な応援を受け、安定して当選してくる人たちもいる。

共産党の議員のように、政党の看板で勝負するオーソドックスな人たちもいる。

町内会などから支援を受け、地域の票をまとめて勝ち上がってくる人たちもいる。このタイプは、地元のお祭りに顔を出したり、地域の要望を役所につなぐのに熱心だ。

建設業協会や医師会など業界団体の推薦をもらって当選する人たちもいる。このタイプは、各種パーティや会合で挨拶の時間をもらうことが重要であり、公共事業や補助金の動向に敏感だ。なお、地域代表型と業界代表型は、わりと自民系無所属に多い。

また、同じ業界単位でも、経営側ではなく労働者側の組合から支援を受ける人たちもいる。このタイプは、労働組合幹部との勉強会&飲み会や旗開き・決起集会といったパーティへの出席が主戦場だ。わりと、旧民主党や社会党の議員に多い。

このほかに、朝夕の通勤時間帯に駅などに立って街頭活動をするサラリーマン代表型がいる。特定の地域や業界などにしぼられないため、「しがらみのない政治」などといったキャッチコピーを掲げがちという特徴がある。固定的な支持者を持たないため票が読めないのが悩みだが、しばしば大量得票したりするものこのタイプだ。

不思議なことに、ママ代表というタイプの議員は全国的に少ない。20〜30代の投票率が低いこともあって、一番困っているはずの子育て世代は政治を使うのがヘタだ。「保育園落ちた。日本死ね」などとボヤク前に、保育園は国ではなく市町村の仕事だということを学習して、地方議員を送り込んだほうがいいだろう

## 政治家は、超ブラックな職業だ。普通の中学生は、目指さないほうがいい。

労働環境の悪い職場は「ブラック企業」「ブラックバイト」などと呼ばれる。その意味では、政治家もかなりブラックだ。料亭で密談を重ねているイメージがあるかもしれないが、ごく一部だ。とりわけ国会議員は激務だ。国会での会議も多い。党の勉強会も多い。地元に戻れば、選挙区も広く、どこへ行っても多くの陳情や要望を受ける。朝は駅頭活動、夜は会合。寝るヒマもない。国会と地元を行き来する移動時間が唯一の心安らく時間という議員も多い。特に、衆議院議員は平均任期が2年半。いつ解散総選挙があるかわからないから、常在戦場だ。秘書を最低3人とえられることが、せめてもの救いだ。一方、地方議員も、秘書などいるのはごく一部で、何でも自分でやらなければいけない。職住隣接だし、時間も自分で都合つけやすいが、いかんせんやることが多い。黙っていても当選できる人の中には、毎日が日曜日のような人もいる。しかし、たいいていの議員は忙しい。しかも、報酬が安い議会だと、兼業で仕事もしなければいけない。だから、村上龍が『13歳のハローワーク』で書いたように、普通の13歳は政治家を目指すべきではない。

## 「首長」は、「クビチヨウ」と読もう。

首長という仕事がある。国なら首相。都道府県なら知事。市町村なら市長・町長・村長。つまり、役所のトップだ。これを総称して首長と言うが、正確には「シユチヨウ」と読む。しかし、会話の中で使くと「主張」「酋長」みたいでまぎらわしい。しかも、もともと行政組織を人間にたとえたときに、その頭みtainなものだから「首」長と名付けたわけだ。そのため、慣例的に首長は「クビチヨウ」と読みならわすことになっている。

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.26】

**政治家は、地域限定の芸能人みたいなもので、プライベートがない。**

政治家は人気商売だ。その意味では、芸能人と似ている。そういえば最近、芸能人と同じくらい政治家のスキヤンダルを目にする気がする。仕事とプライベートの境目もない。町内会の行事に出るのも、関心のある本を読むのも、仕事なのか私用なのか区別できない。ちなみに私は、三笠焼という横須賀名物を歩き食いしていたら、後日「みつももないからやめなさい」と叱られたことがある。ファミレスで質問原稿を書いていたら、後日「夢中でゲームやってたでしょ？」と言われたこともある。そもそも、政治家は公人なのでプライベートはないも同然だ。私生活を暴かれても、文句は言えない。それは有権者の判断材料とみなされる。一般人なら名誉毀損で訴えることもできる。だが、政治家は一定の誹謗中傷は甘んじて受けなければいけない。それは裁判の判例からも明らかだ。それでも、それも含めて楽しめる人には、やりがいのある仕事だ。

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.37】

**沖縄県は、公職選挙法の治外法権になっている……  
ように見える。**

日本の法律というものは、基本的に全国どこでも一律だ。地域ごとに規制値等が違うことはあっても、適用されない地域というものはない。ただし、特区(国際戦略特区や構造改革特区など)に指定されると、法令の適用除外となることがある。ところで、沖縄県は、公職選挙法の特区にはなっていないが、事実上、「治外法権」「無法地帯」になっているかのようだ。見逃しが多い。公共の電信柱や樹木にまでポスターを貼る。名前入りのノボリや看板を平気で立てまくる。呑み屋を回って「置き忘れた」との名目でチラシや名刺をゴソツと置いていく。……他の46都道府県と比べ、あまりにもやんちゃだ。逆に言えば、政治意識の高い土地柄でもあるかもしれない。



【中学生にもわかるセイジの話 Vol.36】

街中でよく見かける政治家の看板。「連絡所」と書いてあるが、たいがいタテマエだ。



よく街中に政治家の看板がある。政治活動用立札看板というもので、個人名義で6枚、政治団体名義で6枚まで立てることができる。よく見ると、「連絡所」「後援会事務所」など書いているはずだ。つまり、政治家本人と連絡をとることができるように後援会の人などが連絡役を引き受けている場所、という設定になっている。が、今の時代、現職議員であれば普通、住所や電話番号が公開されている。候補者であっても、検索すればたいがいホームページがあり、LINE アドレスやSNSの連絡先も書いてある。だから、多くの場合、連絡所というのはタテマエだ。実際には、政治家の名前と顔を覚えてもらうために使われていることが多い。本当に訪ねるとビックリされるかもしれない。

※写真は、私の立札看板。断っておくが、これは本当の事務所の看板である。

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.47】

議員こそ「プロ市民」じゃないか。

よく市民活動をしていて行政や議会事情にやたらと詳しい人がいる。そういう人を「プロ市民」などと揶揄する議員や市職員がたまにいる。しかし、市民活動≠政治活動を、報酬をもらってプロフェッショナルの職業としてやっているという意味では、議員こそ本当の「プロ市民」と言えるだろう。

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.48】

## 政治の世界にも、業界用語がある。

拡声器は「ラッパ」。選挙カーは「センシャ」。朝の街宣活動は女性が口に出すと少し恥ずかしい「朝立ち」、夕方なら雨も降っていないのに「タ立ち」。絶対に勝つ強い候補者は「鉄板」、どうやっても勝てそうにない泡と消える候補者は「泡沫」。100万円の札束は「コンニャク」や「瓦」、1000万円の札束は「レング」、違法に配るお金が「実弾」。裏のある旨い話は「毒まんじゅう」。女性運動員は「ウグイス」、男なら「カラス」、候補者のダメーは「影武者」。候補者がお供を連れて練り歩くスタイルを「桃太郎」。衆議院議員だけ何故か別名「代議士」。国会議員は基本、火？金が国会で土日月が地元なので「金帰火来」。「政策」「第一」「第二」「私設」は国会議員秘書の種類。よく有名政治家と本人と一緒に写っているポスターは「二連ポスター」：…まだまだある。

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.49】

## 政治家は兼業OK。

国会議員も地方議員も首長も、政治家はみんな兼業でもいい。会社の社長や取締役が、他の会社の役員をしてもいいのと同じだ。ただし、国会議員が市長を兼職するようなことは、昔はOKだったが今はNO。議員や首長といった公務員は、辞職しないと他の公務員にはなれないのだ。

## 「義務教育」は、キミが教育を受ける義務なんかじやない。大人たちが教育をする義務だ。

よく、小中学校の教育を「義務教育」と呼ぶ。そして、大半の人が、これを「子供は、学校で勉強するのが義務だ」とカン違いしている。かつて、私もそうだった。実際のところ、行政職員や議員の中にも誤解している者が少なくないのだから、ムリもない。しかし、憲法第26条二を読み返してほしい。「保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負ふ」と書いてある。そして、教育基本法第5条三には、国や地方が「その実施に責任を負う」と書いてある。つまり、「保護者は、国や地方の行政を使って、ちゃんと子供を教育してあげなきゃダメだぞ」という義務なのだ。……だから、キミ。学校がどうにも耐えられないなら、行くな。行く義務なんてない。そして、保護者や教師に、キミたちに合った教育をするよう、要求しなさい。なぜならそれは、この国のルール(憲法)に定められた、キミたちの当然の権利だからだ

# しつかりと 聞いてほしい 大事な話。

【中学生にもわかるセイジの話 Vol.1-1】

ザンネンなお知らせ。実は中学生のキミも、約一千万円の借金を抱えているんだよ。

ニッポンでは、オギヤアと産まれたその瞬間から借金を抱えることになる。ちなみに横須賀市に生まれたキミの場合、国が852万円+県が41万円+市が71万円+965万円となる(国約1080兆円+県約3兆7600億円+市約2900億円の各人口割)。でも、安心してください、払えますよ……県と市の分は。ほとんどが、いわば住宅ローンなので、借金とは言っても健全な投資。ハコモノを豪華に建てすぎて、若干借り過ぎだが、まあ何とかなる。モンダイは、国の借金だ。こっちは健全な住宅ローンよりも、サラ金がどんどん増えている。国は「景気が良くなれば返せる」とか言っているが、要するに子どもや孫へのツケ回しだ。特に、今の若い人は戦後最大の借金を抱えることになる。選挙権がないか、選挙権を行使しないと、こういう仕打ちが待っている?」そういうことなのかもしれない

市や国の借金は、あなたにどんな影響があるのか？ 要するに「先輩が食べたスキヤキの代金を、あなたが払わされる」という話なのだ。

前々回の vol.111 で「誰もが一千万円ぐらいの借金をしている」と書いた。つまり、国県市の借金のことだ。しかし、「行政の借金が自分にどんな影響があるのかわからない」との声も頂いた。では、レストランにたとえて説明しよう。今回は長編だ。

普通のレストランなら、入るのも入らないのも自由だ。しかし、市や国は寮の食堂のようなもので、必ず食べることになっている。しかも、行政サービスは、メニューから選んで注文するのではない。日替わり定食しかない。なおかつ、代金は強制的に給料天引き(税金徴収)される。

寮の食堂は、この代金の中から厨房設備(道路や下水道等のインフラ)をリースで借りている。そして、「おいしいトンカツも提供したいので、フライ機を導入しました」「冬には鍋料理も出したので、カセットコンロを導入しました」という具合に整備をしてきた。確かに、料理の幅も広がって美味しくなったので、みんな満足してきた。

ところが、段々と寮生の要求がエスカレートしてきて、寮の先輩が「今度は、スキヤキが食べた」「ビフテキを出せ」と言いはじめた。最初は、食堂担当者(政治家)も「さすがに、1食500円の予算じゃスキヤキはムリです」と抵抗していたのだが、寮の先輩たちが「そんなこと言っていると、オマエたち食堂担当者のクビをすげかえるぞ。カネを借りてでもスキヤキを出せ」と迫ったので、スキヤキやビフテキも出すようになった。しかし、当然ながら予算はオーバーするので、その分、仕入れ先へのツケ(赤字国債)で高級な食材(高福祉)を仕入れるようになった。また、厨房設備もなるべく増やさず、老朽化しても買い替えずに使うようにしたため、ときどき故障するようになった。

こうしてリース代金は減らしてきたものの、食材仕入れのツケはだんだん膨れ上がってきて、いくら大口の取引先だとはいえ、いずれは返済を迫られるだろう。そうなったら、借金を返すために1食500円のうち100円を返済に回して、400円の予算で作るしかない。そうになったら、新入りの寮生たちから「1食あたり500円も払っているのに、こんな料理しか出ないのかよ。ボツタクリだ」という声が挙がるだろう。あるいは、1食あたりの徴収額を600円に値上げ(増税)するしかない。でも、先輩の寮生の発言力のほうが強いので、スキヤキ廃止も値上げも、なかなかできずにいる。

いずれは、新入りの寮生たちは「この会社(ニッポン)で、毎日高くてマズイ飯を食わされ続けるんだったら、あの会社(海外)に転職したほうがいいんじゃないかね? この会社は安定しているかもしれないけど、徐々に売上げ下がっているよね。だったら、あの会社のほうが業績伸びてるし、チャンスも多いはずだよ」という選択をするかもしれない。なにしろ、先行きが不安だ。

……これが、いまのニッポンの借金の現状だ。

## あとがき

政治のことを、みなさんはどこで習っただろうか？

実は、きちんと習ったことがない人がほとんどではないだろうか。

くくく

「選挙に行くのは大事」だとは思う。私たちのお金を集めて、その使い方を決める人。私たちが暮らすうえでのルールを決める人。そんな政治家を選ぶのは、大事なことだとは思う。

でも、政治はとつきにくくて、実感も薄くて、ちよつとだけダーティなイメージもある。だから、他人事として任せておいたほうが気が楽だ。それに、これまでそんなに困ったこともなかった。

くくく

そんな人が大半ではないだろうか。

とはいえ、子供が生まれたり、親の介護が必要になったり、何か困りごとが起きたとき、役所の手を借りることになる。そのとき、役所の仕事ぶりに腹を立てて、「政治家はいったい何をやってるんだ？」と文句を言うケースが、実に多い。

でも、それは市民も政治家もお互いに不幸ではないかと思う。

小中学校の義務教育は、この社会の一員を育てることが最大の目的だ。それが教育基本法の精神だ。しかし、戦後ニッポンは、不毛なイデオロギー的対立の中で右も左も萎縮して、この社会の仕組みをきちんと教えることを避けてきた。その結果、暮らしていく中での、いきいきとした政治の使い方、政治との向き合い方を、誰もが習ったことのないまま大人になってしまった。日本はいま、そんないびつな先進国になっている。

では、どうしたらいいのか？ まずは、小中学校できちんと教えることだ。

しかし、教師自身がきちんと知らないのに、いきいきと教えることができない。

そこで大事なのが、教師も含めた大人たちを、再教育することだ。ただし、現時点で、きちんと確立した再教育プログラムはない。

だからこそ、その再教育は、現場を知っている私たち政治家が担うべきなのではないか、と考えている。

「地方政治は民主主義の学校」と言われる。

私は地方政治家として、この「学校」で学び、そして教えてきた。神奈川県横須賀市という地方政治の現場を「学校」として、民度の高い市民のみなさんに鍛えられながら、自らもチラシで民主主義の精神をわかりやすい言葉で伝え、教える教師役を担ってきた。多くの学生インタビューを受け入れながら、若い人たちが何を知らないのか、どんな言葉で伝えたらわかってもらえるか、自分なりに模索してきた。そう自負している。

この学びのエッセンスを、できるだけ多くの方にお伝えしたいと考え、この文章を編んだ。少しでも、政治を身近に感じ、政治を使いこなして頂くきっかけになれば幸いです。